

REVIEW ARTICLE

On the Everyday Studies: Repetition and Attention in American Poetry

(日常性研究について——アメリカ詩の場合)

Reviewed by Tomoyuki Iino*

BOOKS REVIEWED: Siobhan Phillips. *The Poetics of the Everyday: Creative Repetition in Modern American Verse*. Columbia University Press, 2010, xii+319.

Andrew Epstein. *Attention Equals Life: The Pursuit of the Everyday in Contemporary Poetry and Culture*. Oxford University Press, 2016, xi+364.

序

文化批評において、日常、あるいは日常性というテーマが論じられるようになったのは1990年代初頭のことである。思想的背景の基礎をになった Michel de Certeau と Henri Lefevbre がそれぞれ1986年、1991年に死去し、それをきっかけに再評価が始まったと見ることはできる。以後、人文学のさまざまな分野で日常(性)を中心テーマとする研究書が出版されて、その傾向は今日もおお衰えていないようである。しかも、思想的参照枠は代表的な上記2名のみならず、たとえば現代では哲学者の Stanley Cavell、さかのぼって19世紀後半から20世紀初頭にかけての William James、Henri Bergson、はては古代ギリシャの Heraclitus にまでおよぶ。研究分野も多岐にわたり、一例を挙げれば Richard Deming の *Art of the Ordinary* (2018) は美術、映画、哲学、

* 飯野 友幸 Professor, Department of English Literature, Sophia University, Tokyo, Japan.

文学と諸分野を横断しながら日常性の意味を探ろうとしている。¹ それにしても、日常性とはありふれていて意識する機会が少なく、それだけにあえてあつかうのが難しい題材であり、多くの研究が論を起こすときにまずそのことに触れている。そもそも何らかの形で日常を対象としない文学作品のみならず表現行為など考えがたい一方、日常という概念そのものにしてから、everyday、ordinary、quotidian など語彙の選択次第で規定も変わってくるにも難しさがある。それでも、日常性を出発点とする研究を見るにつけ、常に先行研究に何らかの新たな視点をもたらしていることは注目にあたいする。本稿の目的は、ジャンルを限定して評者の専門領域であるアメリカ現代詩に特化し、2冊の研究書を紹介しつつ比較・検討することによって、このテーマに潜む本質と可能性の一端を明らかにすることである。

1

まず Siobhan Phillips 著の *The Poetics of the Everyday: Creative Repetition in Modern American Verse* を俎上に乗せたい。フィリップスは4人の詩人を論じるにあたり、「ありふれた日常という重荷をみとめることが、所与の現状という賜物を発見する一つのやり方」(2)であるという点から始める。これは、フィリップスよりも時代をさかのぼってモダニズム詩における日常性を分析した先駆的研究である Liesl Olson の *Modernism and the Ordinary* の指摘、つまり当たり前すぎて表現しにくいものを表現する文学をあつかうという逆説(12)を踏襲したことになる。² フィリップスはより具体的に、「日常の実践ということこそ主観的自由と客観的必要性を効果的に続けさせ」(4)、しかも両者のあいだに齟齬をきたさない、という前提のもとで抒情詩研究 (lyric studies) へと踏み込んでいく。その際、重要になるのは、流れゆく毎日における「時間的繰り返し (repetition)」であると指摘して、著書全体の中心的モチーフに据えている。そして、4人の詩人の作品を分析していくなかで、具体的には、繰り返しという「特殊な時間制が、いかに日常的存在への興味を続けさせるための自己成型を可能にするか」(7)が究極の問題であるという点で、自己という問題が常に問われる抒情詩研究への意識を提示している。ちなみに、フィリップスは思想的・批評的基盤を広範に挙げていくなかで、先駆者ドゥ・セルトーとルフェーブルの名前にはほんの数行だけ言及するのみで、最重要人

物として *Repetition* と題する著作のある Søren Kierkegaard の名前を出す。そして、「繰り返しこそ没入からも怠惰からも人を救う要素である」(13) というキルケゴールの著書『恐怖と戦慄』の一節を引用して自論の裏付けとしている。

フィリップスがあつかう 4 人の詩人のうち、Robert Frost と Wallace Stevens は、Ezra Pound に端を発する実験的なモダニズムのアメリカ詩からは一線を画していたし、後の世代に属する Elizabeth Bishop と James Merrill は第二次世界大戦後の新しい詩の傾向に背を向けて比較的保守的な詩風を維持した。フィリップスも 4 人の詩を“conservatism”とまとめている。モダニズムとの距離ということでは、ひとつにはパウンドや T. S. Eliot が文化的・文学的伝統を重んじながらも、神話をきわめて実験的に導入するなどの革新的な方法論により時間を解体したことに対抗し、むしろ持続的な時間を明確に表現していたこと——つまり繰り返しをむしろ強調したこと——がまず挙げられる。さらに、詩風こそ異なるものの、一つの共通点として、程度と趣旨の違いこそあれ 4 人も韻律を使い続けたことも特筆にあたいする。というのも、韻律こそ、パウンドが 20 世紀初頭にイマジズム運動を通して排除しようとした詩的伝統であり、モダニズムが 20 世紀中葉にほぼ終息したのちも自由詩がアメリカ詩の大半を占める傾向が続いたからである。しかも、韻律を墨守する定型詩こそ、同じ音節パターンの行を繰り返し、しかも脚韻を踏むことで二重の連続運動を作り、日常性を明白に前景化するからである。

ただし、多岐にわたるアメリカ詩人のなかから、この 4 人に絞った理由として、日常という「変わりゆく同じこと (“changing sameness”)」のもたらす障害と利点の両方を「[他の詩人]より十全に劇化している (“dramatize[s]... more fully”)」ことを著者は挙げる(7)。「十全に劇化」するとは一見わかりやすい言い回しであるものの、客観的な基準を設けていない点で説得力に欠けることは否めない。

2

フィリップスの具体的な分析手順においては、時間を平凡な日々における個人とその環境にまつわるものとみなしたうえで、繰り返しを記憶、服喪、罪悪、贖罪などの抽象概念に結びつけられる(8)。その点で、アメリカ詩と日常についてのもう一冊の研究書との決定的な差

異があらわになる——それは Andrew Epstein の *Attention Equals Life: The Pursuit of the Everyday in Contemporary Poetry and Culture* で、日常性の詩学をアメリカ現代詩のなかに求めながら、こちらはまったく異なる主旨で、まったく異なる詩人たちを分析している。エプスティンも最初はルフェーブルの日常性への定義——「日常生活とはこれ以上ないほど自明でありながら、もっともあやふやな概念」(17)——から説き起こすのだが、主題として選んでいるのは注意力 (*attentiveness*) である。そんな選択の背景には、世の中の多くの部分がデジタル化され、その結果人が注意散漫に陥ったという生々しい現実があり、数ある日常性の研究では意外に看過されてきたことだとエプスティンは言う。それは 1990 年代半ば頃から (Virginia Woolf にならって) 「人間性が変わった」ほどの激変であり、著者はその影響で生まれたいくつかの象徴的な現象を挙げる。たとえば、仮想現実化が進んでいった反動として昔ながらの *real* なものを人々が求めはじめ、テレビ番組にもそれが反映されたりするなか (日本にも同じ現象は見られる)、平凡な日常の見直しが始まり、そこに美を見出しさえもした。さらには、「退屈さ」の研究が進み、スロー・フードに見られるように「スロー」もトレンド入りする。その意味で、本書の射程はより社会的である。

それに基づいてアメリカ詩の考察に踏みこむとき、日常という主題が「制度化しようという企てすべてを擦り抜け……[伝統的]形式の支配をかかず」(182)³ というルフェーブルの言葉を参考にし、日常性の批評を手ぎわよくまとめた Ben Highmore の手になる論集 *Everyday Life and Cultural Theory* から詩において「日常性を描くには形式上の実験が必須かもしれない」(22)⁴ という主張を引用することで、エプスティンはより実験性の強い詩人を選んだことの根拠とする。その点でもフィリップスの著書との違いは顕著であることがわかる。具体的には、彼らの詩とは「*attention* の生み出す情報と知覚に形を与えるもの」(19)であり、「結末と啓示を避けて、断片とコラージュを使うこと、極端な繰り返し、一覧、カタログ」(19)などで日常をそのまま表わすことが中心であり、とりわけ長編詩こそが日常性の複雑さと幅広さを反映できるとも付け加える。結末と啓示は「日常のものが想像的に何か重要で『美しい』ものへと転換する」(23)というパターン化されすぎた構図へと常に持ちこむがゆえに、「日常の詳細とは非日常的で奇跡的」(25)と決めつけてしまいがちなのだ。例としてエプスティンが紹介するのは、アメリカ詩史ではたびたび“middle of the road”などと分類される Bill Collins、James Wright、Edward Hirsch といった詩人た

ちである。エプスティンによれば、このような「おなじみのレトリックは日常への飢えが当該の歴史的・文化的背景にいかに関わるか、なぜわれわれ自身の時代にそれが高まったか、ということを理解する道具をあたえてくれない。そして、詩形式という問題や、それが日常の美学とどのように関係するかを完全に見落としている」(22)。それゆえ、「毎日というものをあつかう幅広さについての繊細な分類、豊かな理解が必要になる」(26)と結論づける。

それに基づいてエプスティンが選んだのは「毎日とその毎日性すべてで提示することであり、退屈さをきれいに整理したり、瑕疵を理想化したり、陳腐さを補ったり、矛盾をなめらかに直したりしない」(26)詩人たち、たとえば20世紀半ばから詩作を始めたA. R. AmmonsやJames Schuylerといったメリルと同世代の詩人である。彼らの企てに共通するのは「ヒエラルキーの転覆」(27)であり、それによって日常の些末なものへの観察眼も育まれる。この点で、1970年代というポスト構造主義／ポストモダン的な潮流が広がり始めるなかで書かれた作品が選ばれるのは当然といえる——「多くのトレンド、芸術的実践、そして社会政治的發展が集中し、そこから無数の方向へと付随的な流れが生み出された」(37)時代であり、「日常生活の美学という物語の重要な一章であり、その狂騒的活動と未曾有の革新は、ありきたりさの現代的探求にとっていまだ基底として働いている」(37)と独特の雄弁な口調で規定している。フィリップスが選んだestablishmentに属する詩人たちとの対照はここでも明らかだ。

具体的な分析を見てみよう。エプスティンが選んだ作品から、アモンズの*Tape for the Turn of the Year* (1965)を見ていくと、ある年の暮から正月にかけての日常の出来事が特に整理されることもないまま即興的に書き連ねられている。特に、通常のタイプライター用紙ではなく、商店の会計用に使われた幅の細いレジロールというまさに日常性に即した用紙に詩行を打ちこむことで、かぎられた一行のなかに定期的・継続的に言葉を綴るというユニークな方法論が可能になった——内容に著しい差異はあるものの、やはりロール紙を使って切れ目ない即興性をもくろんだ点ではJack Kerouacの*On the Road*を想起させ、第二次世界大戦後に多用されはじめた書法でもあることは明記しておきたい。こうして、日常性がありのまま詩に体现され、かつ高貴なものにも卑俗なものにも分け隔てなくattentionが注がれることになる。

20世紀初頭からのアメリカの長編詩の系譜を見直すならば、モダニズム詩人たちによって難解・複雑な長編詩が多様に書かれるなかで、

顕著な特徴としては *disjunctive* な言語操作・配置による実験性とまとめられる。かいつまんでいえば、言語の連続性を断ち切ることである。この傾向は 20 世紀中葉まで続いたのち、徐々に反動の火の手が上がり、長い詩に連続性を取り戻すという見直し作業が始まった——*sequence* への移行というまさに連続性を強調するような書法であり、上記のアモンズ作品はその典型である。⁵

一方、フィリップスの論に戻るならば、こちらは詩のテーマから内容への検討という方向性をとる。たとえば、ビショップを論じた章では、フロリダ州キー・ウェスト時代に書かれ、反戦的な内容が盛りこまれた“*Roosters*”が取りあげられ、キリスト教的な *reference* が一日を過ごすことへの救いであったことがまず確認される。そして、時を経て書かれた“*Anaphora*”では朝と夕方を巧みに対比させて 1 日の流れそのものの意味を吟味することで、2 編の詩の間に内容の変化がみとめられるという結論にいたり、『『地上的な性質』』を享受することで重荷……を取り除き得る。繰り返しの実践がこの詩では時間的重圧を軽減する(122)とフィリップスは述べて日常性を強調する。宗教的な価値観から世俗的なそれへの移行に注目することは、ビショップのみならず他の詩人についての章にも当てはまる。そこには形式への視点もなくはないが、最低限に抑えられているところにエプスティンとの差異が明白に出ている。“*Roosters*”に関しては「押韻された 3 行連が進行する螺旋」(120)という形式的特徴が紹介されるものの、あくまで内容との関連が主で、詩中に言及されるペトロの裏切りに話が進み、「鶏の三重の糾弾」(120)へと象徴的に結びつけられるだけで、形式そのものがもたらしうる意味は考察されない。徐々に音節数を増やしてピラミッド状に長くなる 3 行連が連綿と続き、しかも 3 行ともゆるやかに押韻されるというこの詩の特異な形式のみならず、繰り返しのそのものの効果にさえ言及はなされないのだ。また、“*Anaphora*”においても「第 2 連の最後の“*assent*”は第 1 連の最後の“*descent*”を鏡のように映す——ビショップのダブル・ソネットは日常的なサイクルを実現するとともに報告する」(122)と結論づけるだけで、朝と夕方という 2 連の形式における相似性と内容における対照性という *ironic* な構造が分析されることはない。

結びに代えて

以上のように、本論ではフィリップスとエプステインの研究書を比較し、両者の特徴をきわ立たせた。日常性というトピックを基に異なる主題が設定されるだけでなく、内容に重きを置くか、形式に注目するか、という点でも対照的なアプローチを取るのである。さらに、思想的基盤の面でも両者に違いがあることを最後に記しておきたい。フィリップスを選んだ詩人たちにとって「日常のリズムは、静止と変化という偏在する時間的両極を避ける——この研究の詩はエリオットの『静止の一点』に代表される永遠性を探求しない」(4)点で上述のように前衛派モダニスト詩人との差異が明らかになる。その一方、「ベルクソンの進化の流れにおける“fluidity”も、ウィリアム・ジェイムズの後期哲学における経験の“flux”も受け入れない」(4)と主張することで *changing sameness* の“sameness”が重要なことがここで明らかにされる。それに対して、ベルクソンの *fluidity* とジェイムズの *flux*こそまさにエプステインの論じる詩人たち——アモンズのみならずスカイラーなど——の詩を支える原理なのであり、両研究書の違いはこの点で決定的となる。⁶

Notes

1. Richard Deming, *Art of the Ordinary: The Everyday Domain of Art, Film, Philosophy, and Poetry*, Cornell UP, 2018. デミングはヘラクレイトスの哲学を日常という視点から検討したのち、問いかける。「たとえば、「日常」は[ヘラクレイトスのような]ソクラテス以前の哲学者にとって何を意味するのか。彼にとっての日常はわれわれと同時代の日常と同じなのか」(11)。たしかに、日常というものの捉えがたさにくわえて、時代による違いも考慮に入れる必要があることも、このトピックの難しさなのである。
2. Liesl Olson, *Modernism and the Ordinary*, Oxford UP, 2009.
3. Henri Lefevre, *Everyday Life in the Modern World*, Penguin, 1971.
4. Ben Highmore, *Everyday Life and Cultural Theory: An Introduction*, Routledge, 2002.
5. 最初に“sequence”という用語を使ったのは M. L. Rosenthal & Sally M. Gall, *The Modern Poetic Sequence: The Genius of Modern Poetry*, Oxford UP, 1983 であり、現代英米詩におけるモダンからポストモダンへの移行を説明する試みである。
6. この点でベルクソンとジェイムズについて詳細に比較しているのは、オルソンの研究書に2年先立って英米モダニズム文学と日常性を論じた Bryony Randall, *Modernism, Daily Time and Everyday Life*, Cambridge UP, 2007 である。